

両面に書写された典籍の修理  
(重要文化財 新編仏法大明録 八冊(財団法人松ヶ岡文庫所蔵))

宋末の圭堂居士撰になる本書は、大慧宗杲撰「正法眼蔵」を解説したもので、東福寺を開いた円爾の筆本とされる鎌倉時代中期書写の現存最古写本である。「普門院」の印記があり、東福寺伝来であることが知られるが、石井積翠軒文庫を経て、現在は松ヶ岡文庫所蔵となっている。

本書は、押界を施した楮紙打紙を料紙として半葉六行あてに両面に書写した冊子本である。本文のほかに朱墨の調点が施されるほか、多数の不審紙、爪点が確認される。縦に半折したものを重ねて、折りの外側で糊付けする粘葉装の体裁を取っているが、明瞭な糊痕が確認できず、糸や紙捻で仮綴じされていた。

修理前は、綴じ部分を中心に多数の虫損があり、冊子としての形状を保ち得ないものもあった。また料紙は雲母引きした漉返紙を打紙加工した密度の高いもので、墨・朱が剥落しやすい状況であった。

修理の方針として、開閉の取り扱いができる冊子に復すること、本文のみならず朱墨の調点・爪点・不審紙等の情報を失わないことを大きな目的とした。

冊子の場合、補修紙を当てた多数の虫損部分が重なると、本紙と糊代の重なりによって、凹凸が発生し新たな損傷の原因となる。特に綴じ部分の凹凸は仕立てに影響し、開閉に支障をきたす。そのため糊代の重なりをできるだけ薄くする必要がある。また、料紙の両面に書き込まれた調点などを補修紙が隠さないように、文字部分の糊代の面積を可能なかぎり少なくする必要があるのである。

通常の冊子修理では本紙の片面から補修紙を当てていくが、本紙が密度の高い平滑な打紙のため補修紙がはずれやすく糊代を多めに取らねばならず、結果として、文字部分にも補修紙が大きく掛かり、研究上の利用が困難になる嫌いがある。

これらを勘案し、本修理ではDIIPS(本文8ページ参照)で作製した補修紙を本紙の両面から虫損部分に当てるという新しい手法を用いた。まず欠損部の形状に合わせた補修紙抄紙シートを作製し、漉き嵌めにより表裏二枚の補修紙を用意する。次に補修紙の糊代部分を薄く仕上げて、打紙加工の後、本紙の半分の厚みに仕上げて欠損部の表裏からあてがう。両面からの補修紙の糊代で本紙を挟むため、少ない糊代でも補修紙がはずれにくくなり、加えて重なりを薄くできるため、料紙本来の柔らかさに沿った補修が可能となった。補修紙が文字に重なる部分は、その部分の糊代のみ削り取っても、ほかの部分で両面から支えることができるため、両面に書写された墨線を補修紙が隠すことはない。

補紙のほか、欠失した表紙を補い、錯簡を訂正して仕立て直し、新調した桐櫛奩箱に収納した。新しい技術の積み重ねによって、本紙に優しい現状維持修理が可能となった一例である。